

～創設期の東部公民館スタッフとの 出会いの中で～

青野友太郎 (せんがわまちニティ情報センター)
(実篤記念館友の会)

“新しき街・せんがわ／今日そして明日”をテーマに、小さな連続シンポジウムが1977年春、東部公民館の主催で開催された。メインテーマは「実篤公園の活きた運営を考える」であり、地元の有志が主体となって集まった。前年4月に武者小路実篤が亡くなり、自宅と愛蔵品が調布市他に寄贈されたことを受けて、“共有のものとして、開かれ、遺されたものに、いかに対峙するか”をめぐって話し合った。

この企画を担ったのが、“杜思の会”という、当時30歳デコボコのコミュニティづくりをライフワークとする編集者やプランナーの仲間だった。76年8月にスタートしたばかりの会で、メンバー10人の内の1人が、創設期の職員の阿部実氏だった。日頃の会合は新宿の喫茶店であったが、10月に東部公民館での打合せを持った。フィールドとして、仙川地区と小平市があがっていて、その晩は「コミュニティ情報センターをホップ・ステップとするコミュニティ形成の試み」による“仙川実践プラン”がテーマであった。

その全3回のシンポジウムは、日曜日午後の3時間の企画で、第1回“今せんがわでは～その魅力と可能性”、第2回“新しき街とは…そのイメージを拓げる”、第3回“新しき街の鎮守の杜～実篤公園の活きた運営を考える”のテーマで、講演・映像上映・提言・座談会と多様に構成されたイベントであった。毎回、B4判のガリ版刷りの案内チラシを千枚印刷し、同館職員の新井稔昭氏らと周辺の住宅へのポスティ

ングや駅前配布に汗を流した。延べ70名余の参画を得て開催された。

その後、参加者に呼びかけ、77年4月に“新しき街・せんがわの会”をスタート。毎月2回の会合を重ね、翌78年1月に“せんがわまちニティ情報センター”を発足させた。実篤さんが“終の住処”として賞でた、この仙川のまちづくりのキャッチフレーズは“新しき街”以外にはない。そして、まちコミ誌『せんがわ・21』は、公園オープンの3カ月後の8月に、「実篤公園」を特集テーマとして創刊された。

『せんがわ・21』は、仙川地区の約1万世帯と、学び・働き・買い物に来る人たちの“共有財”として、毎号5千部を印刷し、各戸への無料配布をメインとした。創刊号は、週刊誌大で、グラビア8頁、本文36頁の贅沢なもので、版下づくりを含めて、スタッフによる手づくり、ボランティアの作品だった。有志からのカンパなど支援と広告代が資金源であった。「21時＝午後9時」からのコミュニティライフの多彩な拓がり、人と人を結びつける“せんがわの総合雑誌”である。また、情報センター主催で、せんがわ風ボロ市、紅白歌合戦流のせんがわ音楽祭や、まちづくり講座などのイベントも実施してきた。

『せんがわ・21』は2001年新春の写真特集「せんがわ・新世紀送迎響想曲」以降、残念ながら休刊中である。27年間で18号という、実にスローな刊行ペースであるが、今も、“持続する志”は有している。仙川エリアの人たちをコアに、他地域からの応援団を得て、“せんがわ人”のパワーにより、活動を再開できる時期を俟っている。

この“まちニティ”プロジェクトの立ち上がりは、東部公民館の創設期と重なり、さまざまな活動を実現し、現在に至っている。今、この“ご縁”を実感している。